福井市グリフィス記念館歴史講座　「サムライ・ジャパンの大学校」　2023. 3/4

【第一節　開化 150 年】

令和の現代から百五十年さかのぼった時代は、明治の初期。いわゆる文明開化の時代です。開化と聞いて連想するものは、鉄道・電信といったインフラ、断髪・新暦や通称名乗の統一といった慣習の革新、新聞・学制など様々ありますが、野球もその一つです。そして野球と国家的教育制度、両者のはじまりは不可分の関係にあります。

明治九(1876)年、東京で日本人チームと外国人チームの試合、すなわち最初の日米野球が行われことが、当時の米国で新聞報道されています（日刊スポーツ 2016 年連載記事「明治九年の日米野球」参照)。その記事"The Game among the Orientals"によると、出場した日本人は the Japanese students at Imperial College at Tokio、すなわち東京開成学校の生徒たちでした。彼ら学生に最初に野球を教えた存在は、その学校の米国人教師ホレス・ウィルソンでした（佐山和夫『明治五年のプレーボール』)。東京ドームの野球殿堂博物館では、2003 年に殿堂入りしたウィルソンが紹介されています。新聞記事には両チームの出場選手名が掲載されており、Foreigners には三番左翼のウィルソンら御雇米国人や外交官、Japanese の方には当時の学生名簿で確認できる姓が並んでいます（後掲プリント「日米野球事始めと福井の生徒たち」)。現在「日本野球発祥の地」の記念碑が立つ学士会館の周辺、東京神田錦町・一ツ橋地区こそ、東京大学の前身校であるこの学校の跡地であり、その学校こそが、福井を去った W.E.グリフィスが帰国までの二年半の間、精力を傾けた仕事場でした（彼は明治七年に帰国していますが、福井での後任教師だったエドワード H.マジェットが試合当時には一ツ橋の英語学校で教えており、一番セカンドで出場しています)。

［※日本野球の発祥については、野球狂の正岡子規(升＝のぼる＝ノ・ボール＝野球、という雅号をもつ)が、起源は新橋の鉄道局らしいと新聞『日本』に書いたことがあります(1896 年 7 月)。その記事に対し、一ツ橋の「南校」(開成学校の前身で、明治五年当時の校名）が本当の発祥地だと投書があり、数日後に訂正記事として掲載されました。］

本日は、東京開成学校の成り立ち、その学校の教師と生徒たちについてお話しします。生徒たちについて知ると、実は彼らが本当の意味での「サムライ・ジャパン」であったことがわかります。そしてその事実にこそ、「東京在住時のグリフィス」という存在を歴史的に理解するための鍵があるのです。

【第二節　新日本のサムライボーイズ】

明治の初め、グリフィスやマジェット、M.N.ワイコフ(ラトガース大学出身、のち明治学院大学教授）らが教えた福井の明新館、E.W.クラーク(ラトガース大学出身。グリフィスの親友)が教えた静岡学問所、L.L.ジェーンズが教えた熊本洋学校（日下部太郎の盟友横井大

平が創設に尽力）など、諸藩が設けた洋学校は新時代を切り開く人材を育てる貴重な役割を果たしましたが、そんな力と強い意志をもつ旧大名家は、小は実高数千石までの三百諸藩の中では例外的存在でした。明治政府は東京で運営する洋学校「大学南校」に、諸藩が選んだ計三百余名（大藩は三名、中規模藩は二名、小藩は一名）を留学させ、開化の人材として直接養成することを企図し、明治三年七月(1870)全国に布達しました。グリフィス来日の半年前です。この制度により、新時代を担う青年武士の日本代表、まさしく「サムライ・ジャパン」としてかき集められた学生たちを、「貢進生」といいます。彼らは御家の名誉を担って選抜されたはずですが、地方の教育環境を省みれば、洋学の素人同然で上京した者が少なくないのも当然でした。貢進前からの在学生を含め約六百の学生で再スタートした南校でしたが、前途はあまりにも多難でした。

外国語を学び、その言語で新しい学問に取り組む…、ついていけないのが普通です。田舎から出てきて、前途の見えない生活となった青年たちがどうなったか、推察は容易ですが、ここは福井藩貢進生斎藤修一郎（府中本多家の臣）の回顧から引用します。「所謂都会の悪感化を受け、酒色に惑溺して貢進生の体面をも顧みず身を持ち崩した不心得な学生も少なからず」。斎藤の批判は学校当局にも向かいます。新時代のために西洋レベルの高等教育を施すといっても内実「我が所謂大学の如きは、殆ど彼の地の小学程度」でしかないではないか。先の見えない現状を打破するため、見込みのない生徒は「些の容赦なく此を淘汰し」、南校の教育レベルを引き上げて真の人材養成機関とするよう「当局の長官閣下の反省を切望す」、彼は先輩数名（同郷の栗塚省吾ら）と図って文部省トップに直接建言を呈しました。ただ血気の学生有志がその挙に出るに当たり慎重を期したのは、淘汰されるべき学生の方もまた、未だ廃刀以前の時代を生きる誇り高きサムライボーイに違いなかったからです。「まだまだ此の時分の社会と云ふものは封建の余風を受けて中々盛んに武張ったことが流行つてゐる。腰には例の長刀を二本横へイザ鎌倉と云はば、直ぐに鞘を払って斬り掛かると云ふ殺気満々の時である。そこで時の当局長官と往来をなし、学校の内事を論議してゐるなど云ふ秘密が若し一般の学生間に漏洩して、種々に風説などを生じやうものなら、彼等の腰間三尺の秋水は忽ち其の計画者の頭上に閃くのである。(中略)其決心の誓文として連署血判をなし、大胆にもその実行に取り掛かったのであった」（以上『斎藤修一郎懐旧談』）。

生徒側からの訴えは、前途を憂える文部省当局者たちの背中を押す結果となりました。明治四年の秋（グリフィスはまだ福井にいます）、南校は一時閉校となり、貢進制は廃止され、生徒数を半減させて再開しました。斎藤と共に福井藩から貢進された生徒仙石亮(まこと：藩士喜左衛門の子)は、後年明治を代表する鉱山技術者の一人として活躍する人ですが、この時は学力不足で退校した半数の生徒のひとりであり、工部大学校（工部省が運営。南校は文部省）の卒業生として世に出ることになります。

南校は未だ高等教育の水準で学べる生徒がいない実状に合わせ、校名も「中学」と改めました（第一大学区第一番中学。学区は明治五年発布の学制で採用）。そして翌六(1873)年に

高等教育課程をもつ「開成学校」となり、中等教育を修了した生徒がそれぞれ専門の学科に取り組む大学としての組織も整えるのです（プリント「東京開成学校ができるまで」）。
明治九年当時の野球少年たちが通った学校は、新日本を担う「サムライ・ジャパン」が集うべき内実を備えたものになっていました。「東京大学」への改名は、翌十年のことです。

【第三節　新日本を築いた異人たち】

「英仏独の三大語学は整然完備の学校にして、その教師もよく力をその職につくし、その生徒の進歩も欧州の学校に比較してはづる所なし。」『ダウヰドモルレー申報』1873 年

この報告書を書いた文部省顧問デイヴィッド・マレーは、ラトガース大学の数学・天文学教授としてグリフィスや日下部太郎、畠山義成(東京開成学校校長)たちの先生だった人です。文部省に招かれて来日し(契約 1873〜1878)、日本の近代教育の基礎をつくった恩人として尊敬されています。しかしマレーが視察した開成学校が既に称賛に値するものとしてあったのは、淘汰を経て残った学生たちの奮励だけでは説明できません。なにしろ、ほんの三年前に来日した直後、学校の様子を見たグリフィスが著書に記した当時の回想には、「よく力をその職につくし」た教師とは到底表現できない人物像が列記されているからです。
「最初に来た「教師」は飲屋上がり、兵隊上がり、水兵上がり、書記上がりなどであった。パイプをくわえて教えたり、ばちあたりな言葉を言って授業を切り上げたり、教室で落ち着きがなかったり」…　グリフィス『明治日本体験記』(1876 年出版 The Mikado's Empire の後半部、山下英一訳)。

日本の「大学」が最初に採用した外国人教師の多くは、悪質な素人でしかありませんでした。採用を選考したのが、外国の教育に無知な役人たちだったからです。彼らは、近代の学問に取り組むために習得を要する言語を、その言語の話者なら誰でも教えられるという程度の感覚で、東京や横浜に滞在する外国人を適当に任用していました。教師の質を問えるほど外国人という存在を知らず、学問のための言語教育でありながら、教育を受けた人間を専門職として雇う必要が認識できない…日本人にとって全く新しい学びのしくみを一からつくることは、当時の行政官にとって身に余る務めでした。現場の実状がどれほどひどくても、責任ある肩書の日本人たちは、管理者としての能力を自らに問うこともなく、信頼すべき外国人を求めて権限をゆだねる気にもなりませんでした。一人の「先生」が現れるまで。その人、ギド・ヘルマン・フリードリン・フルベッキ(1830-1898)こそ、グリフィスを日本に招き、親交を結び、グリフィスがその身辺で、その献身を、具さに観察し、その伝記(邦訳『日本のフルベッキ』、訳と考証：村瀬寿代)をもって後世に伝え、教育における日本近代化の最大の貢献者と評価する、いわばサムライ・ジャパンの外国人監督でした。グリフィスの証言を再び『明治日本体験記』から引きます。「(フルベッキ教頭は) 仕事に暗い役人、寄せ集めの教師、行儀の悪い学生をかかえて、疑念、無知、とりわけ悪い日本人の虚栄心や自負心と戦わねばならなかった。数年の苦闘の結果、ついに道徳的に立派になった」。

南校に集められたサムライ・ボーイズを、本物のサムライジャパンに変えることができた

唯一の人物。彼が南校教頭、すなわち学校の一教師ではなく、管理運営にあたる幹部に任じられて、その手腕を揮うことができたのは、維新前に積んでいた経験のおかげでした。

教育者としてのフルベッキの仕事は、宣教師としての仕事の準備作業でした。彼は伝道のために米国のオランダ改革派教会から派遣された宣教師でした。日本が開国してまもなく(1859 年)来日しましたが、もちろん幕末の日本で公に福音を伝えることなどできません。彼は長崎で日本人と交流し、日本語を修得しました。オランダ生まれで多言語に通じる、教養ある国際人は、武士たちとの交流によって彼らの信頼を得ました。そして長崎で、幕府および佐賀藩が運営する学校の教師をつとめました。多くの青年武士が彼に学びました。フルベッキによって、海の向こうの未知の世界が、彼らの手の届く距離感の現実になりました。諸外国が関わる複雑な政治情勢についても、教養人フルベッキが解説してくれたことは、彼の生徒だった日下部太郎の国元への報告書から見えます。

横井小楠のふたりの甥がアメリカで学ぶ志から海を渡り、七年前にフルベッキを派遣した海外伝道局の、当時の幹部 J.M.フェリスの庇護を受けてニュージャージーで学問に励みはじめて間もなく、日下部も同じツテにより渡米して彼らに合流しました。このルートは幕末の志士が海を渡るよすがとなり、日下部が亡くなる明治三年に始まる日本の大留学時代（三年間で四、五百名が海を渡った時代）の本流ともなりますが、その時代を象徴する「岩倉使節団」構想自体が、フルベッキの言葉を種として芽吹いたものでした。

使節団の派遣に先んじて、岩倉具視のふたりの息子(具定と具経)がニュージャージーへ留学したのは、彼らも長崎におけるフルベッキの生徒だったからです（学生たちの有名な集合写真で、フルベッキ親子の両隣に写っています)。渡米した岩倉具視は、日米の強い絆をなす貢献としてフェリスたちの親切は何よりも大きいと称える感謝状を、大久保利通と連名で贈りました。岩倉はフルベッキから直接助言を得てこの使節団を催しましたが、フルベッキがその見識を頼られたのは、その二年前に元生徒の佐賀藩士、大隈重信に書き与えた意見書のゆえでした。大隈や副島種臣が高官となった維新政府が、彼らの師フルベッキに東京での教職を依頼し、宣教師一家が十年暮らした長崎を後にしたのは明治二年のことでした。東京で政府が運営する洋学校において、翌年には「教頭」という仕事を託された背景には、彼が政府最高幹部の子息や、最も有能な幹部自身の恩師だったという経歴以上の事情があります。フルベッキは教育に関してだけでなく、政府幹部の陰の政治顧問としてあらゆる問題に助言を求められ、答えていました。その事実はグリフィスほか少数の証言以外では、ほとんど知られることがありません。フルベッキが自身の真の役割について、決して表で語らなかったからです。「外国人顧問」が自らの存在を秘していることこそ、日本の高官たちが彼を信用して頼ることができる最大の要素であることを、彼はよく理解していました。「御雇外国人」に頼ればこそ、彼らを雇っている監督者は自分たち日本人だという建前に束縛されたミカドの臣僚たちの苦しさもまとめて引き受けていた自己犠牲の人物。それはグリフィスにとって、後世に伝えるべき最も高貴な肖像、キリスト教徒の範だったといえます。

グリフィスが教師として来日したのは、フルベッキが本国に派遣を依頼した案件にふさわしい人物として彼が伝道局により選ばれたからですが、その案件はフルベッキ自身が任されている学校ではなく、越前福井藩の要請によるものでした。本当はグリフィスに東京に留まって自分の片腕になってほしい、それほど南校は優秀な教師を切実に必要としていました。紛い物や間に合わせの人材ではない、本物の教師を務められる、確かな人間性と学識を備えた人物。それが教育の場において最も重要な存在であるという当たり前のことが、グリフィスが福井にいる間に南校関係者の間で共有されはじめたことは、フルベッキの本国への書簡からうかがえます。「大学の当局者は当地や横浜で頼んでいた人々ではなく、米国から正式の学校教師を招聘することに決定したようです。今大学当局者が求めているのは、ヴィーダー博士やグリフィス氏のような科学者ではなく、もっともこれらの人々は、その時と場所によっては望まれるであろうけれども、希望としては私たちの公立学校で教えるような優れた学校教師です。すなわち英語、数学、及び科学の初歩などの立派な基礎知識をもった人々、そして特に立派な品性を備えた人々、宗教家またはキリスト信者です」（高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』：1871.7/20）　やがて彼は、本国でカレッジの学長を務めていた P.V.ヴィーダー、そして廃藩に伴う環境の変化から東京への転任に気持ちが動いていたグリフィスを、自分の学校の人材として手に入れます。ただ、彼らが本来高等教育を担える人材だったのに対し、生徒の側がまだ中等教育の水準にありました。書簡にある「時と場所」として開成学校が発足する前の明治五年、「立派な基礎知識」「立派な品性」をもつ第一番中学の先生の一人として、ホレス・ウィルソンもいました。彼が生徒と共に学校の構内で白球を追い始めたであろう、この年が「日本野球発祥の年」とされています。

日本の開化の尖兵を育てたい政府と、一日も早くその人材となるための学を修めたいと志す生徒たちが、共に求める高等教育課程を実現するためには、まず地に足のついた中等教育を整備せねばならない、そんな当然すぎるけれども成しえていなかった課題を克服するため、グリフィス、ヴィーダーたち高等教育に必要とされた人材が、中等教育の教壇で奮闘することになりました。明治五年の南校生徒の時間割では、進級の度合で学科が割り振られていますが、英語で学ぶ最上級の「英一の部」から「英三の部」の生徒たちは、化学も地理も文学もグリフィスから学んでいます。さすがに一人ではなく、物理はヴィーダー、代数はフルベッキ、作文は E.H.ハウス、という具合に各学年の科目を四人で分担していますが、「英五の部」の諸学課はウィルソンが全て教えています。こうして質の高い教師を集め、質の高い教育を施す体制が整ったことで、志ある生徒を日本の開化の代表選手たるべく育てる学校として、有名無実の状態を脱却したのです（プリント「開成学校の 13 人」）。

忘れてならないのは、幕末から引き継がれた洋学の伝統です。南校の新体制では「正則」すなわち外国語（英・仏・独語）による授業（「変則」は日本語による授業）が採用されましたが、日本人教師も外国人教師の助手として、欠かせない存在でした。グリフィスの化学の助手は、幕府洋学校(開成所)の化学部門の中心人物だった宇都宮三郎でした（福井で彼の優秀な通訳・助手として活躍した岩淵龍太郎も同じく開成所出身です）。南校自体を開成所

の後身とみなすこともできますから、外国人教師と日本人洋学者は、フルベッキの学校運営の両輪だったと評価すべきでしょう（上級の学課表で「図画」を一人で担当している日本人教師高橋浩は、日本の洋画の先駆者高橋由一として知られる人です。彼も開成所出身です）。開成学校開業式の年(1873)、働きづめだったフルベッキは退職しました。その仕事の価値は、この年学校を視察したマレーの報告として、本節の最初に掲げた通りです。

【終わりに】

東京におけるグリフィスの生徒は英語部の上級生（南校の一～三部、開成学校予科上級、本科進級生）でした。中等課程を修了した生徒たちは、専門課程として法学・化学・工学専攻にそれぞれ進級しました。東京大学最初の卒業生は化学科の生徒です（1877 年 7 月）。

この時代の最も優秀な生徒は、実は卒業生ではありません。卒業を待たず、成績上位者が明治八、九(1875、76)年に文部省によって先進国に派遣されました（米九、英八、仏三、独一名）。近代日本のエリート留学の始まりです。彼らは留学先でもトップクラスの実力を示し、帰国して御雇外国人と共に、各分野で日本の開化の先頭に立ち、やがて彼らにとってかわる存在となり、「ヤトイ」の時代を終わらせました（プリント「グリフィスの生徒たち」）。

今回の歴史講座は、福井においても「東京のグリフィス」の再評価を促したいとの思いで企画しました。それには何より、彼が教えた学校の歴史的重要性、換言すれば、東京大学がまだその校名を名乗る前の時代の「黎明期の仕事」の価値が認識される必要があることから、学校の最大の功労者で中心人物であるフルベッキと、その時代の生徒たちに焦点を絞りました。

グリフィスは日本化学界において、福井の明新館における先進的教育内容と、東京大学前身校である開成学校最初の化学教授としての功績を評価されています。本講座では、近代教育草創期の「中等教育者」として、開化のリーダーたちの基礎学力を確かなものに育て上げた仕事を先ず評価したいとの視点からお話ししました。グリフィスが中等教育者であったからこそ、生徒の活躍の場は科学・技術から司法・行政、中等・高等教育まで、多岐にわたります。「明治のサムライ・ジャパン」を育てた名コーチ（野球ではありませんが)、「東京のグリフィス」はそのように評せると思います。

明治の「先人」となったサムライ・ボーイズの、異人たちへの感謝の念は後年まで失われることはなく、各界で「御雇外国人」たちは今も顕彰されていますが、決して広く知られているわけではありません。教育、産業、外交などの「現場の人たち」の歴史に光が当たる時、知られざる外国人とサムライたちが共に築いた近代日本の実像が浮かび上がります。グリフィスという存在が、そうした歴史の「窓」になれば、何よりうれしく思います。

〇明治二十九年七月二十二日の新聞『日本』に筆名「好球生」より投稿された「ベースボールの来歴」は、岩波文庫『正岡子規ベースボール文集』に収録。また南校時代の学課表は、『東京帝国大学五十年史』にあり、国会図書館のデジタルコレクションにより閲覧可能です。

東京開成学校ができるまで

十八世紀、世界の動きを正確に知るための正確な暦づくりを志した八代将軍の熱意は次代に継承され、一人の天文学者が大阪から江戸に呼ばれました。大坂町奉行所与力高橋至時が天文方に任用されて改暦に取り組んだ当初、彼が依拠した学術書は北京で活動したイエズス会士の手になる漢籍でしたが、やがて高橋はフランスの天文学書（蘭訳本）に出会い、求めた知識がそこにあることを知ります。オランダ語を知らなかった高橋は、暦書の翻訳に没頭して命を縮めました。高橋の死から七年後（1811)、天文方内に蘭学者を集めた洋書翻訳部局「蛮書和解御用」が発足します。時代は既に蝦夷や長崎で軍事的緊張が高まる情勢にあり、幕府においても海外情報を集めて分析する必要が認識されていました。洋学者たちによる研究組織は、日本が国際社会に直接参加する新時代に貢献する人材を養成しました。この部局の後身が幕末洋学の拠点「開成所」であり、グリフィスが教えた「開成学校」です。

安政二年(1855)に蘭書翻訳御用を拝命した勝麟太郎（海舟）たちの「洋学所」が、翌年「蕃書調所」として杉田成卿（玄白の孫で、橋本左内の師)、箕作阮甫（津山藩)、川本幸民（三田藩）ら錚々たる教授陣を揃え、旗本の子弟が通う学校を開きます。蘭・英・仏に加え、市川斎宮（福井藩）らによりドイツ学の先駆ともなった組織は、文久二年(1862)、一ツ橋門外の火除地だった護寺院ヶ原に移って「洋書調所」を開校します（翌年「開成所」と改名)。この時からグリフィスの時代に至るまで、現在の千代田区一ツ橋及び神田錦町（学士会館が所在し「日本野球の発祥」で有名）が、日本の洋学教育の拠点となります。川本や宇都宮三郎（南校時代もグリフィスと共に化学教育を担当）が牽引した開成所の化学教育が、オランダ人教師 K.ハラタマを招いて更なる発展を期した直後に、幕府は倒壊しました。

鎖国の世には文字情報に頼る他なかった洋学界ですが、開成所の時代には海外経験をもつ人材を多数抱えていました（福沢諭吉ら使節団員。中村敬宇、西周、津田真道ら留学生)。徳川宗家の移封により彼らの多くが駿河に去り、明治政府は旧幕府の人材と並んで、日本在住の外国人を頼りとしました。長崎の幕府及び佐賀藩の学校で教えていた宣教師 G.フルベッキが東京の「開成学校」に招かれました。政府は昌平黌を大学校として引き継ぎ、開成学校（旧開成所）と医学校をその分局に位置づけ（明治二年十二月にそれぞれ「大学南校」、「大学東校」と改名。校名は湯島の昌平黌から見た方角に由来。東校は神田和泉町)、大学別当松平春嶽が文部行政を束ねました。春嶽は和漢洋全ての学問を重視する教育を志しましたが、国学者と漢学者の対立による機能不全を呈した本校（和漢）を廃止し、辞職しました（明治三年七月)。南校と東校が残された後、諸藩に南校への「貢進」が布達されました。

日本が諸藩に分かれていた当時、加賀藩や福井藩のように積極的な洋学教育を行う強い意志と能力を備えていた一部の藩を例外として、新時代の学問の必要性と、地方における教育環境との間には埋めがたいギャップがありました。そのため中央政府は全藩に、その規模に応じ最低一名、有為な青年を選んで東京の官立学校で学ばせることを命じたのです。彼ら「貢進生」は御家の名誉を背負って上京し、教頭フルベッキの監督する大学南校に入りまし

たが、全く外国語未経験の者もあり、大学と呼ぶには程遠い初心者集団の実状でした。

貢進生三百余名及び同規模の開成所以来の生徒が共に学ぶ場となった大学南校ですが、「大学」に代わる「文部省」の発足（明治四年七月）に伴い「南校」と名を改めて間もなく(九月)、一旦閉校します。高等教育を目指す以上、先の見込みのない者は淘汰すべきだと必死の訴えを起こした学生有志の声に応え、貢進制を廃し、生徒数を半減させて再開しました。専門課程に進む生徒の成業を一両年に期して、当面は基礎を固める普通教育の充実に努めました（明治五年八月の学制発布に伴い、校名は「第一大学区第一番中学」となります)。

在日外国人材に依存していた教師の質の低さも深刻でした。フルベッキは米国本土から福井藩校の要望により招いた教師グリフィスに南校での雇用という選択肢を示しました。グリフィスは当初の約束通り福井へ赴任しましたが、一年後に南校へ移ってフルベッキを支えることになります（明治五年一月)。米国からは P.V.ヴィーダーという、大学の学長を務めていた人材も得られました。ヴィーダーやグリフィスほどの学識者でなくとも、基礎をしっかり教えられる本物の教育者を、フルベッキは本国宛ての手紙で切実に求めています。

明治六(1873)年四月、中等教育修了生のための専門課程を備える開成学校が遂に発足し、ここまで働き通しだったフルベッキが現場を去りました。七月に文部省の顧問として招かれた D.マレー（ラトガース大学の数学教授として、グリフィスや日下部太郎の恩師）が学校を視察した報告書に、草創期の教師たちがやり遂げた成果が表れています。「英仏独の三大語学は整然完備の学校にして、その教師もよく力をその職につくし、その生徒の進歩も欧州の学校に比較してはづる所なし」(学監米人博士ダウヰドモルレー申報、一部改字)。

翌七(1874)年五月の「東京開成学校」への改称は、文部省トップの意向でした。三年後に医学校と合併して「東京大学」となって以降、英語の College や University を表す日本語として「大学」が一般に定着し今日に至りますが、当時の文部卿は「開成学校」をその種の名詞として認識したようです。グリフィスが離職して日本を去る二ヶ月前のことでした。

グリフィスの離職の意志は既に前年の日本人幹部との対立に発していましたが（本人によれば、縁故採用の権威主義者と衝突して嫌気が差し、政府高官に抗議した結果慰留されたものの、半年だけの契約延長で帰国した)、背景にはフルベッキの離職にも通じる事情があります。明治の草創において政治家が外国人に求めたものは、当時未知の存在だった西洋についての本質的で多様な問いに対する適切な回答であり、国の針路を相談できるほど信頼できる人間性でした。金銭的動機によらず東洋の辺境に住み、日本語を含む多言語を操り、一般教育に勤しんでいた知識人フルベッキこそ、教育のみならず国家建設のアドバイザーとして求められた人でした。しかし草創の段階を脱し、新国家の見通しが立った時、必要とされたのは各領域における専門家たちでした。宣教師フルベッキに代わり「大学教授」マレーが招かれ、「化学」R.W.アトキンソン、「工学」R.H.スミス、「法学」W.E.グリグスビたち各科専門教授として招かれた教師たちが、グリフィスの生徒を引き継ぎました。今回の企画は、明治政府が右も左もわからない草創期に苦労を共にし、確かな土台をつくり道を示した後、その業績を忘れられた先駆者の一人として「東京のグリフィス」に焦点を当てたものです。

開成学校における W.E.グリフィスの生徒たち

日本が学校教育において近代の学問を普及させることを目指し始めた時代は、まだ教科書も外国語文献に頼らざるを得ません。明治期の学校では、外国語のわかる日本人教官が日本語で指導する方式を「変則」、外国人教師の授業を外国語で受ける方式を「正則」と呼びました。開成学校において国家エリートたるべく養成される生徒は正則コースでした。明治八(1875)年に文部省が米国へ留学に送り出した開成学校の最上級生がいずれも現地で優秀な成績を修めることができたのは、彼らがその前年まで在籍したグリフィスたち外国人教授の指導により、英語の訓練と学問の基礎をしっかり積んでいたからです。東京におけるグリフィスの生徒を代表して、彼ら留学生の名を挙げておきます。

三浦(鳩山)和夫（1856-1911）1877 コロンビア大学法学士、'78 エール大学修士'80 法学博士
真島(作州勝山)藩貢進生。江戸家老の子息で、都会人の振舞が周囲から完全に浮いていたが、常に成績トップを維持した。その抜群の学力を米国でも示し、博士号を得て帰国。弁護士、教育者、衆議院議長、外務次官など官民双方で活躍。息子と曽孫が首相となる。

小村寿太郎（1855-1911）1877 ハーバード大学法学士
飫肥藩（今の日南市）貢進生。外務官僚の道を歩み、日露戦争期の外務大臣として有名。講和交渉で滞在したポーツマスで、開成学校時代の恩師 E.W.クラークと再会。「よく覚えていますよ。クラーク先生からは有機化学と電気について教わりました。グリフィス先生からは無機化学と、法学を！」と、外国人教師が多様な科目を担っていた当時を懐かしんで笑ったという。自らの生い立ちについて書いた開成学校時代の優れた作文がグリフィスコレクションに残されている。

菊池武夫（1854-1912）1877 ボストン大学法学士
盛岡藩出身。法科クラスの中でも「老熟者であって思慮周密、事あるに当ては必ず(菊池)君の裁断を仰ぐ位の信望があった」(穂積陳重の弁)。帰国後、教育者・弁護士として活躍。英吉利法律学校創立発起人の一人で、後身中央大学の初代学長。

斎藤修一郎（1855-1910）1878 ボストン大学法学士
福井藩貢進生。筆頭家老府中本多家の家臣。明治三年の藩主松平家と本多家の対立「武生騒動」で決死の覚悟をしたこと、留学生に選ばれようとして鳩山を讒言し、後に悔いて鳩山に外務省の重職を斡旋したこと、鹿鳴館時代に井上馨の片腕として奔走したことなど、波瀾万丈の半生の「懐旧談」を残す。南校の生徒淘汰を訴えた生徒有志の一人。教官からも一目置かれた学校の名物男で、天皇が臨幸した時には御前でスピーチしている。

長谷川芳之助（1856-1912）1878 コロンビア大学鉱山学士、'80 博士
肥前唐津藩貢進生。性格は傍若無人、成績は化学科最優秀。天皇臨幸の際、南部、杉浦（後述）と共に御前で実験した。三菱に入社し、岩崎弥太郎の信を得て鉱山事業を率いたが、弥太郎の没後、念願の製鉄事業は実現せず退社。後年、八幡製鉄所の創設に貢献。

南部球吾（1855-1928）1878 コロンビア大学鉱山学士
父は戊辰戦争で民政官として活躍した福井藩士南部広矛。三菱に入社して髙島炭鉱など九州の事業の中核を担い、のち本社の鉱業部長、重役を務めた。
松井直吉（1857-1911）1878 コロンビア大学理学修士、'80 博士
美濃大垣藩貢進生。帰国後日本人最初の化学教授に就任。帝国大学総長。
平井晴二郎（1856-1926）1878 レンセラー工科大学工学修士
加賀金沢藩出身。帰国後、北海道の鉄道建設に献身。函館の水道工事監督や、赤煉瓦の旧北海道庁舎の設計でも知られる。鉄道庁総裁。明六社に参加した知識人杉亨二の娘、陽と結婚したが早くに死別した。杉陽は官立女学校でグリフィス姉マギーの生徒だった。
原口要（1851-1927）1878 レンセラー工科大学工学修士
肥前島原藩貢進生。卒業後、米国で橋梁・鉄道建設の経験を積んで帰国。初代鉄道技監。

グリフィスの教え子の中から、明治九(1876)年に英国に留学した生徒も紹介します。
入江(穂積)陳重（1855-1926 宇和島藩貢進生)、向坂兌（さぎさかなおし 1853-1881 下野佐野藩貢進生)、岡村輝彦（1855-1916 上総鶴舞藩貢進生）の三人は、1879〜1880 にミドルテンプル(法曹院)で法廷弁護士(バリスター)資格を取得。向坂は早逝したが、穂積は帝国大学教授、岡村は裁判官・弁護士・教育者として長く近代日本の基礎づくりに貢献した。穂積の妻歌子は渋沢栄一の長女で、官立女学校でグリフィスの姉マギーの生徒だった。
櫻井錠二（1858-1939 加賀金沢藩）はロンドン大学で化学を学び、日本における基礎科学研究推進の先駆者、化学界の牽引者となり、理化学研究所の創設に尽力した。杉浦重剛（1855-1924 近江膳所藩貢進生）もマンチェスターやロンドンで化学を修練したが、帰国後は雑誌「日本人」など言論活動において知られ、教育者として畏敬された。
関谷清景（1855-1896 美濃大垣藩貢進生）は機械工学を学ぶため滞在したロンドンで肺を患い帰国。東京で物理学教授 J.A.ユーイングの助手となり、彼や J.ミルンに地震観測・研究手法を学び、初代地震学教授となる(後任が福井出身の大森房吉)。ミルンと共に黎明期の地震学会を担ったが、病の身で被災地の調査に赴く度にその命を縮め、早世した。
増田礼作（1853-1917 豊後府内藩貢進生）と谷口直貞（1854 大和郡山藩貢進生）はグラスゴー大学に留学。増田は東北の鉄道建設に貢献した技術者、鉄道技監として、谷口は東京職工学校や帝国大学工科大学の機械工学の教授として名を残す。敦賀から福井に至る鉄道は原口要が測量の指揮をとり、増田が敦賀出張所長として森田駅まで着工させた。

上記の生徒たちは開成学校在学中に留学したため、この学校の最初の「卒業生」にはなりませんでした。最初の卒業は明治十(1877)年七月、グリフィスの教え子である化学科の高須碌郎、久原躬弦、宮崎道正（それぞれ姫路藩、津山藩、越前大野藩出身）の三人ですが、この年に校名は東京大学に変わりました。彼らが「東京大学最初の卒業生」です。（宮崎は札幌農学校の教師となり、杉浦重剛と共に新聞『日本』にも参画しました)。

開成学校の 13 人（と、その他数名）

「開成学校」が発足した 1873 年 4 月、教頭 G.フルベッキは積年の労苦ですっかり疲弊し、健康回復のため半年間の休暇を得て欧州へ旅立ちました。10 月に日本に戻りますが、その前月に教頭を退任し、12 月には学校を辞めました。従って彼が政府の教育行政の中心にあったのは、ちょうど開成学校が発足するまでと言えます。彼が休暇で学校を離れるまでに南校・開成学校の教職に採用された外国人の内、10 月の開業式時点まで在職していた 12 名を、経歴詳細不明の人も含め、フルベッキと共に開成学校をつくった 13 人として展示で紹介しました。学校に貢献した外国人教師の代表として彼らを選んだ理由は、教職に不適格で早期に、また短期間で離職した人を除外（及び某ドラマの題名に便乗）するためですが、開業式までに退職していた人の中にも当然貢献を顕彰すべき人物はいますので、ここでは数名プラスしてご紹介します。（番号は展示紹介順、「雇」は南校・開成の在職期間）

①Hermann Ritter　リッター（1827～1874：雇 1873.3 月-‘74.12 月）独

大阪の理学校から転任してきましたが、在職中惜しまれながら天然痘で亡くなりました。博士号をもつ経験豊富な化学者だった彼の講義は優れた内容で、大阪時代に英語で行った講義のノートは市川盛三郎（福井藩の科学者として活躍した市川斎宮の息子）による和訳が出版され、彼の没後も日本の学生たちに重宝される化学教育の遺産となりました。

②Erwin Knipping　クニッピング（1844～1922：雇 1871.10 月～’75.9 月）独

航海士として来日したクニッピングは、開成学校に勤めてドイツ語や数学を教えた後、運輸官庁で航海士試験や気象観測の指導に努め、滞日二十年に及びました。日本初の全国天気予報を発信、気象台を国際水準に高めました。

③Carl Schenk　シェンク（1838～1905：雇 1871.12 月-’75.7 月）独

技術者のシェンクは、開成学校在職中にクニッピングの姉と結婚しています。英語化学教師だったグリフィスの在職中ずっと、ドイツ語学生に化学を教えていたのがシェンクです。明治の地質調査・鉱山事業を主導した和田維四郎(小浜藩出身)も、シェンクの教え子です。展示で紹介した手紙では、グリフィスの友人である松平春嶽が、魚の化石を二つ贈るので、一つをシェンク君にあげてほしいといっています。

④Seger　ゼーガー（雇 1872.11 月-’74.4 月）独

ゼーガーも元々造船技術者として日本で働いていた人で、学校では数学など教えました。

⑤H. X. Maillot　マイヨ（1831～1874：雇 1870.8 月～’74.8 月）　仏

⑥Emile Lepissier　レピシエ（1826～1874:雇 1872.3 月-‘74.6 月）　仏

⑦Fontaine　フォンテーヌ（雇 1872.4 月-‘75.4 月）仏

⑧Pigeon　ピジョン（雇 1871.2 月-’73.11 月）仏

フランス語上級生(一～三ノ部)の教師三人。ピジョンは下級生(四ノ部)の担任でした。上級生の理系科目をマイヨ、文系をフォンテーヌ、数学を天文学者のレピシエが教えています。

マイヨは在職中に急逝し、「理学士邁誉(マイヨ)君墓」が横浜外国人墓地にあります。

⑨Peter Vrooman Veeder　ヴィーダー（1825～1896：雇 1871-‘78）米

来日前サンフランシスコで学長を勤めた教育者であり、牧師でもありました。帰国後も数学・物理学教授だった彼と、帰国後牧師になる青年教師グリフィスとが英語部の柱です。

⑩William Elliot Griffis　グリフィス（1843～1928：雇 1872.2 月-‘74.7 月）米

開成学校化学教師。展示で紹介した南校の学課表において、上級生(英・一～三の部)の授業を化学の他「生理学」「地理学」「修身学」「文学」と幅広く担任する、中核的存在です。

⑪Horace Wilson　ウィルソン（1843～1927：雇 1871.9 月-’77.7 月）米

「英・五ノ部」の生徒はウィルソンが全教科担任です。英語の他「算術」「体操」など科目が多いですが、彼は内戦期の士官で体力もあったでしょう。

⑫Divie Bethune McCartee　マカティ（1820～1900：雇 1872.10 月-‘77.4 月）米

グリフィスと同郷の宣教師マカティは、赴任した中国からたまたま来日してフルベッキに教職を依頼され、国際法から博物学まで幅広く教えた知識人です。退職後も外交の仕事や宣教で、日本生活の長い人生になりました。

⑬Guido Hermann Fridelin Verbeck　フルベッキ（1830～1898：雇 1869.5 月-’73.9 月）

宣教師として幕末の長崎に滞在中、当時禁止されていたキリスト教への信頼を得るため、多くの武士に洋学を教えました。その中に岩倉具視の息子たちや、日下部太郎もいました。維新後、生徒が政府高官となり、要請で東京へ移り、洋学校の教頭、また政府の影の顧問として大活躍しましたが、本人がその功績について人に語らず、ほとんど知られていません。グリフィスが帰国後著した伝記『日本のフルベッキ』に、当時の内情を書いています。政府機関退職後の二十年間も、長く日本で働き、東京青山墓地に眠っています。オランダで生まれ、アメリカ、ついで日本に渡り、無国籍者となりながら、永住資格を得たわが国の土となるまで、宣教師・教師として自らの人生の務めを果たした一生でした。

Gottfried Wilhelm Wagener　ワグネル（1831～1890：雇 1870.11 月-‘72.3 月、1875.2 月-‘77.2 月）独　有田焼や京都の七宝焼に貢献した、お雇い外国人化学者の代表的存在であり、東京で教職にあった時代も、万博の日本展示監修など政府顧問として常に頼られました。

Georg Albert Greeven　グレーフェン（1843～1898：雇 1872.10 月-‘73.1 月、’74.3 月-’75.2 月）独　万博への日本の出展に貢献。その時の訪欧で共に繊維産業を視察した佐々木権六と、新町屑糸紡績所（高崎市）の建設に尽力しました。学校では数学や工学を教えました。

Edward Howard House　ハウス（1836～1901：雇 1872.2 月-’73.1 月）米

グリフィスと共に南校上級生を担任(作文など)。生徒の学資を援ける熱意ある教師でしたが、離職後は本業の文筆で日本外交のため米国世論を動かし、多大な貢献を感謝されました。

Marion McCarrell Scott　スコット（1843～1922：雇 1871.9 月-’72.9 月）米

グリフィスの東京時代の親友。英語学校での生徒新渡戸稲造は彼を「教育者という言葉のもつ最高の意味の教育者」と敬慕しています。離日後はハワイの公教育に尽くしました。

日米野球事始めと福井の生徒たち

1876 (明治 9 年)年 12 月 23 日に発行された米国の新聞 New York Clipper の野球欄に、The Game among the Orientals と題する記事が掲載されました。当時日本にいた外国人の間で野球熱が高まり、東京と横浜にクラブが設立されたという内容です（東京所属会員 31 名、横浜は 40 名以上)。記事は 11 月 14 日に横浜から送られており、東京・横浜戦、東京・横浜代表と寄港艦船代表の対戦など秋に行われた 4 試合と共に、彼らが夏の初めに先ず日本人選手を相手にプレーしたゲームについても、スコアと出場メンバーの名を伝えています。

FOREIGNERS
1 セカンド Mudgett
2 ショート F. Lacey
3 レフト Wilson
4 キャッチャーDenison
5 ファースト Churchill
6 サード O. Lacey
7 ピッチャーHepburn
8 ライト Stevens

JAPANESE
1 ファースト Ishido
2 レフト Nomoto
3 ショート Hwogama
4 センターKusahorra
5 ライト Tarukami
6 サード Motayama
7 キャッチャーAwokie
8 ピッチャーKumi
9 セカンド Sasaki

この試合は横浜へ帰る外国人数名が汽車の時間に間に合うように 7 回で終了したということですから、場所は東京ということになります。外国人チームは選手がそろわず、外野を二人で守っていますが、34－11 のスコアで勝ちました。記事は日本人選手について、“they are very quick, and generally good throwers”と評価しています。野球の発祥地は米国であり、当時は南北戦争の後、急速に全国的普及が見られた頃ですから、「外国人」の実態は米国人代表です。当然、お雇い米国人の名前も散見されます。四番、八番は外交官で、後に日本の外務省に勤めた H.W.デニソンと D.W.スティーヴンスでしょうし、三番は開成学校教師ホレス・ウィルソンに違いありません。ウィルソンは勤める学校の生徒に最初に野球を教えた人でした。一番 E.H.マジェットも野球大好きの教師で、在京前は福井の明新館でグリフィスの離任後に英語を教えていました（当時はレイシー兄弟と共に東京英語学校教師)。この記念すべき試合の日本人代表はまさに、彼ら米国人に指導を受けた学生たちでした。記事では the Japanese students of the Imperial College at Tokyo)。試合場所も彼らが普段プレーしていた、開成学校の広いグラウンドだったと思われます（今の神田錦町、学士会館の東あたり)。

グリフィスやウィルソンの教室に学んだ生徒の氏名は、『東京開成学校一覧』という史料に残されています。明治九年度の名簿から、試合の出場選手はほぼ推定できます（三番 Hwogama のみ不明。筆記体の誤読で Awoyama とすれば青山元[普通科三級甲]と推定)。

一番	石藤豊太	普通科二級甲	広島県
二番	野本彦一	物理学予科上級	広島県
四番	笠原格	普通科二級乙	敦賀県（今の福井県）
五番	田上省三	普通科二級乙	岡山県
六番	本山正久	法科下級	東京府
七番	青木元五郎	普通科二級乙	栃木県
八番	久米祐吉	法科下級	岐阜県
九番	佐々木忠次郎	普通科二級乙	敦賀県

法科は英語学生の専門科の一つ、普通科は予科、物理学科は唯一のフランス語学科です。生徒が英・仏・独三言語のいずれかで学んでいた第一番中学の後身として、高等専門教育課程を備えるかたちで開成学校が発足した際、三か国語全てで各種専門課程をもつことは無理と判断され、基本的に英語に統一されました。結果、英語の生徒は専門課程で法学・化学・工学専攻に分かれましたが、仏・独語を学んでいた生徒にはそれぞれ単一の課程のみ救済策として設けられました。石藤、野本、田上の三名は仏語生徒でしたが、野本以外英語クラスに転じたようです。石藤は備後福山藩貢進生で、フランス留学後、火薬開発で軍の功労者となります。田上は裁判官、本山は衆議院秘書官、青木は治水に貢献する土木技官となります。

選手の中に、福井出身者が二人います。笠原格(いたる)は北陸に種痘を伝えた有名な医師白翁の四男で、グリフィスは彼をカールと呼んで可愛がりました（リーフレット表紙の集合写真でグリフィスの右下)。佐々木忠次郎は、福井でグリフィスの仕事を援けた藩士佐々木長淳の長男です。長淳は幕末には福井藩の技官として洋式船建造や軍事工場建設に腕を揮い、廃藩後は中央政府で繊維産業の振興に努めました。グレーフェンと共に建議した屑糸紡績工場の建設や、晩年まで続けた養蚕の技術指導など、大きな業績を残しています。忠次郎は東京大学で動物学者 E.S.モースの生徒となった学生時代、師に従って貝塚を発掘し、後年モースを顕彰する記念碑を大森に建てるため奔走しました。動物学者としての業績は昆虫学にあり、蚕も研究対象でした。明治日本を支えたシルク産業に父子で貢献したことになります。忠次郎は 1927(昭和 2)年にグリフィスと福井で再会を果たしました。

1896(明治 29)年 7 月 22 日に新聞『日本』に掲載された記事「ベースボールの来歴」を投稿した筆名「好球生」は、ウィルソンに野球を学んだ一人らしく、「明治七、八年に至りては非常に発達し、終にある人の照会によりて横浜の米国人と試合をなしたることもたびたびなりし。八年、九年の頃は校内毎土曜日には球技盛んに流行し、見物人も山をなして外人と戦ふ時などは非常の人気なりし」と回想しています。「わが記憶に残る創業時代の選手」として、ピッチャー本山、久米、キャッチャー石藤、ファースト田上などと共に名を挙げている、青山元(はじめ)と「中澤博士」も福井出身。青山の父小三郎(貞：ただす)は維新政府参与、群馬県令など歴任しました。中澤岩太は、彼をキャスパーの愛称で呼んだグリフィスと共に上京した人で、息子良夫も父と同じく化学者となり、高野連の会長を長く務めました。